

経済学の理論的彫琢過程と経済学批判(1)

——「労働の二重性」論の確定をめざして——

赤 間 道 夫

《凡 例》

マルクスの著作・草稿・書簡などは以下のように略記した。

1. 『経済学批判要綱』→ *Gr.* テキストは, *Marx/Engels Gesamtausgabe*, II/1.1, 1.2 を使用し, II/1, S. 123. のように略記する。【『マルクス 資本論草稿集1』大月書店, 1981年7月。ただし, これは一部である。】

2. 『経済学批判』→ *Kr.* テキストは, *Marx/Engels Gesamtausgabe*, II/2 を使用し, II/2, S. 345. のように略記する。このテキストに収録されている『『経済学批判』原初稿』などは, その都度明記したうえで, II/2, S. 567. のように略記する。【『マルクス 資本論草稿集3』大月書店, 1984年4月】

3. いわゆる「23冊のノート」(『剰余価値学説史』と称されてきた部分を含む) → 23. テキストは, *Marx/Engels Gesamtausgabe*, II/3.1, 3.2, 3.3, 3.4, 3.5 (既刊部分) を使用し, II/3.1, S. 567. のように略記する。【『マルクス 資本論草稿集4・5・6・7・8』(既刊分) 大月書店, 4:1978年12月;5:1980年7月;6:1981年11月;7:1982年9月;8:1984年11月】

4. 『資本論』→ *K.* テキストは, 原則として *MEW* を使用し, K.I, S. 789. のように略記する。翻訳については新日本新書版を用いたが, 必ずしもこれにしたがわなかった。テキストクリティークを必要とする場合, *Marx/Engels Gesamtausgabe*, II/5, 6, 7, 8, 9 を参照し, II/5, S. 135. のように略記する。

5. 上記以外は, すべて *MEW* を使用し, 簡略化して文中に示した。たとえば, *MEW*, 9 (巻数), S. 791. やマルクスからエンゲルス宛の手紙を *M* → *E*, 1858. 4. 2

(年月日), のように。

はじめに

「労働の二重性」——厳密に表現すれば「商品にあらわされる労働の二重性」(K. I, S. 56.) ——は、「経済学の理解にとって決定的な点」(ibid.,) とするマルクス自身の規定をふまえて、マルクスによる経済学説史の批判的超克の一徴表とされるとともに、マルクス経済学における理論的把握の扇の要をなすとされる。なるほどすでに確定された内容をそのままなぞるだけならば、あらためてこの「労働の二重性」なる問題を取りあげる必要はないであろう。

だが、この問題についての周知の「論争」やのちに詳述するようなグレーゼンをみるにつけ、「労働の二重性」論確定の営為はいまだ必要不可欠とみる。もちろん、小稿での問題関心はひとつの観点からのものであり、真正面からとりあげたものではない。それでもなお、「労働の二重性」論確定なるサブ・タイトルを掲げたのは、これが以下ふたつの圏域に属する、重要な契機になっているからにはほかならず、そうしたアプローチがかえって「労働の二重性」を論じる有効な武器たりえるとさえ思われるのである。ひとつに、「労働の二重性」と経済学批判との関係であり、ふたつに、「労働の二重性」と経済学批判体系との関連である。

それぞれの意味するところをすこしく説明しておこう。

序一 「労働の二重性」と経済学批判

[1] 経済学史上にあって「労働の二重性」の発見は、マルクスその人によるとされる。「商品に含まれる労働のこの二面的性質 (zweischlächtige Natur) は、私によってはじめて批判的に指摘されたものである」(K. I, S. 56.) としつつ、1859年6月11日に刊行された『経済学批判』の参照をみずから求めた、マルクスの記述にしたがうのが通例である。小稿での展開もおおよそこれに沿

うことになろうが、マルクスの経済学批判の随所においてこの「労働の二重性」の把握の意味を問うことを試みてみようというのがここでの問題である。理由はこうである。

まず第1に、経済学説史の流れにあって、とりわけ古典派経済学を対象とした経済学の内容を確認するなかで、「労働の二重性」の理解をマルクス以前にみいだし、古典派経済学のすぐれた先見性を描き出すというそれ自体としては意味のある研究の過程で、経済学説史における順調な継承・発展の流れをおさえきることができるかどうか、である。古典派経済学が事実上「労働の二重性」を把握しているとすれば、マルクスのこの面での貢献度は、マルクス自身の自負にもかかわらず、過小評価せざるをえなくなるであろう。第2に、いわゆる労働価値論の系譜にあって古典派経済学の科学的継承でありさえすれば、当然にこの「労働の二重性」の完全な理解が可能になるのか、である。

マルクスをして「労働の二重性」理解の確信を抱かしたのには、マルクスが当面した焦眉の経済学批判そのものがあつたはずである。この鉅脈を確認するという課題設定は、「序二」で触れる経済学批判体系の構築と無縁ではない。「序二」との架橋をかける意図をもってすこしく概略を述べておこう。

[2] さて、マルクスの経済学批判の道程をあらかじめ巡っておくことが必要であろう。

「ブルジョアの生産諸関係の内的関連を探求するW・ベティ以来のすべての経済学」(K. I, S. 95.)をもって古典派経済学と規定したマルクスは、一定の限定を付しつつ古典派経済学の価値論分析の特徴を抉りだす。「古典派経済学は、価値にあらわされるかぎりでの労働と、生産物の使用価値にあらわされるかぎりでの労働とを、どこにおいても、明文によっては、また明瞭な意識をもっては、区別していない。」(S. 95.)と。ところで、こうもいう。「もちろん、実際には区別をおこなっている。なぜなら、古典派経済学は、労働を、あるときは量的に、あるときは質的に、考察しているからである。」(ibid.,)と。だが、「古典派経済学は、諸労働のたんなる量的区別がそれらの質的統一性または同等性を、したがってまたそれらの抽象的人間的労働への還元を前提するという

ことに思いつかなかった。」(ibid.,)「二重に表示される労働の二面的性格」(ibid.,)を真の意味で理解することができたか否かが試金石である。

マルクスは繰り返し繰り返しこの点を強調している。「ぼくの本の中の最良の点は次の二点だ。(1) (これには事実の一切の理解がもとづいている) 第1章ですぐに強調されているような、使用価値であらわされるか交換価値であらわされるかにしたがっての労働の二重性、(後略)」(M→E, 1867. 8. 24. 強調は原文)あるいは「商品が使用価値と交換価値との二重物だとすれば、商品にあらわされる労働も二重の性格をもっていなければならない、という簡単なことを経済学者たちは例外なく見落としていたのだが、他方、スミスやリカードウなどにおけるようなたんなる労働へのたんなる分解はいたるところで不可解なものにぶつからざるをえない、ということ。これこそは、じつに、批判的な見解の秘密の全部なのだ。」(M→E., 1868. 1. 8.)。

[3] 『資本論』執筆段階で確認されるこうした確固とした「労働の二重性」理解はいかにして可能になったのであろうか。「労働の二重性」は、現行『資本論』中の位置からも容易に推察されるように、その体系構造上、価値論の完成と歩調を合わせている。経済学批判体系化の最初の試みである、1857～58年の『経済学批判要綱』(以下、『要綱』と略す)から始まり、59年の『経済学批判』(以下、『批判』と略す)、『資本論』完成途上の重要な時期である61～63年の「23冊のノート」での錬磨を経る。が、ここではつぎの「序二」での展開をふまえて、続稿であらためて関説しようと思う。

序二 「労働の二重性」と経済学批判体系

[1] 『資本論』中においてこの「労働の二重性」が扇の要をなす箇所何度か試練をうける。

まず、第1部第1篇「商品と貨幣」第1章「商品」第1節「商品の二要因——使用価値と価値(価値実体, 価値の大きさ)」で、商品はなににもまして「なんらかの種類の人間的欲求を満たすひとつのもの、ひとつの外的対象」(K. I,

S. 49.) でなければならないことを指摘し、この欲望を充実させる「あるものの有用性」(S. 50.) が使用価値であること、「富の素材的内容」(*ibid.*) をなすことを確認する。そして、この「富の素材的内容」である使用価値が同時に「交換価値の素材的担い手」(*ibid.*) となり、「ひとつの種類の使用価値が他の種類の使用価値と交換される量的関係、すなわち比率としてあらわれる」

(*ibid.*) が、かの三角形がすべて〈底辺×高さ÷2〉に還元されるように、「商品の幾何学的、物理学的、化学的、またはその他の自然的属性ではありえない」「ある共通物」(S. 51.) である「労働生産物という属性」(S. 52.) だけが残る。

さらに、この「労働生産物という属性」もひとたび使用価値を度外視するかぎり「物的諸成分と諸形態」(*ibid.*) も、「労働生産物の有用的性格」・「労働の有用的性格」・「労働のさまざまな具体的形態」(*ibid.*) もすべて消え失せてしまい、労働の質的区別は一切必要でなくなる。ここに労働はすべて「同じ人間の労働、すなわち抽象的人間的労働」(*ibid.*) に還元されている。

「まぼろしのような対象性以外なものでもない」(*ibid.*) とも形容した「区別のない人間の労働の、すなわちその支出の形態にはかかわりのない人間の労働の支出の、単なる凝固体以外なものでもない」(*ibid.*) ものが商品の価値を形成する。

[2] 次なる規定は、第1部第1篇第1章第2節「商品に表わされる労働の二重性」である。『資本論』中もっとも端的に「労働の二重性」を扱った箇所である。使用価値をつくりだす生産的活動は、「その目的、作業様式、対象、手段、および結果」(S. 56.) によって異なり、有用的属性を有する商品の使用価値に表現される労働となる。そして、この労働を「有用的労働」(*ibid.*) ・「一定の合目的的な生産活動」(S. 57.) ・「特殊な、目的を規定された形態での人間の労働力の支出」(S. 61.) ・「具体的有用的労働」(*ibid.*) と呼ぶ¹⁾。

他方、「生産的活動の規定性」・「労働の有用的性格」(S. 58.) を捨象した

1) のちの分析との関係からすると、「労働は、使用価値の形成者としては、有用的労働としては、あらゆる社会形態から独立した、人間の一実存条件であり、人間と自然との物質代謝を、それゆえ人間の生活を、媒介する永遠の自然必然性である。」(S. 57.) という一節に注目しておこう。もちろん論点となるのはこれとは別の「抽象的人間的労働」のほうであるが。

とき、労働の属性として残存するものは「人間の脳髓、筋肉、神経、手など生産的支出」(ibid.,) 以外ではありえず、「人間的労働力の支出」(ibid.,)・「人間的労働」(S. 59.)・「人間的労働自体」(ibid.,)・「人間的労働一般の支出」(ibid.,) にほかならない。この意味での労働が価値実体をなし、「生理学的意味での人間的労働力の支出」(S. 61.)・同等な人間的労働または抽象的人間的労働」(ibid.,) とされる。

[3] 第3節「価値形態または交換価値」においては、商品とは「自然形態と価値形態という二重形態」(S. 62.) をもつことを明らかにしたうえで、価値対象性が「人間的労働という社会的単位の表現」(ibid.,)・「純粋に社会的なもの」(ibid.,)・「商品と商品との社会的関係」(ibid.,) にほかならないことを明示する。もちろん、この意味は、価値抽象を問題にするかぎりすでに要約しておいた「抽象的人間的労働」の指摘にとどまらず、価値形態にあってはある商品の価値が他の商品の使用価値においてあらわされるという商品生産社会の価値の現象が問題ということである。

「キリスト教徒の羊的性格」と「神の子羊」(S. 66.) とに例えたように、自然形態そのもので価値を表現する謎を解明することに重点がおかれる。この場合、価値形態の具体的展開に関連してやはり等価値形態にまつわる特徴点を列記すればこうであった。第1に、使用価値と価値とは異なるものであるにもかかわらず、「使用価値がその反対物の、価値の、現象形態」(S. 70.) であること、第2に、すでに規定しておいた使用価値と価値との内実にしたがって、うえの表現と同一の、しかもさらに一步立ち入ったものとして、「具体的労働がその反対物の、抽象的人間的労働の現象形態」(S. 373.) であること、第3に、生産手段の私的所有という条件下にあっては、そもそも社会的労働の一環であった私的諸労働は事後的にしかそのことを確証する術を有しない。したがって、価値形態という社会的関連におかれることによってはじめて、「私的労働がその反対物の形態、直接に社会的な形態にある労働」(ibid.,) となること。

商品の無限の広がりとは同時に商品の価値形態の無限の連鎖を創造する。商品形態が発展すればそれに応じて価値形態の発展をもたらす、「労働の

二重性」の規定もさらにその真価を發揮する。

[4] 「全体的な、または展開された価値形態」では、右辺に置かれた商品列がその数だけ左辺の商品の価値を表現する。この場合に、右辺の商品列において表現される価値が「はじめて真に、区別のない人間的労働の凝固体」(S. 77.)としての性格をもつようになる。さらに、「一般的価値形態」では、ある特定の一商品をして「一般的等価物」(S. 81.)の性格を強制し、「一切の人間的労働の目に見える化身、一般的社会的蛹化」(*ibid.*)として通用させる。ある具体性をもった労働を「人間的労働の一般の一般的現象形態」(*ibid.*)とすることを通じて、「人間的労働」・「人間的労働力の支出」(*ibid.*)という本質的性格を露にさせ、「商品世界の社会的表現」(*ibid.*)であることを明示させる。そして、「労働の一般的人間的性格」(*ibid.*)があくまでひとつの関係においてのみ、「商品世界の内部」(*ibid.*)というかぎりにおいて、「労働の独自の社会的性格」(*ibid.*)をもつことがあきらかになる。

この点からすれば、右辺に置かれる商品が一般的等価形態としてあまたある諸商品から排除され固定されることによって、商品世界における相対的価値形態が完結をみ、「客観的固定性と一般的社会的妥当性」(S. 83.)とを獲得することになる。そして、右辺に商品金が置かれたとき、金が一般的等価形態となったとき、金以外の商品を排除したとき、金は貨幣商品となり、この限りでのみ貨幣形態となる。

[5] 第4節「商品の物神的性格とその秘密」においては、人と人との社会的関係が物と物との関係としてあらわれる最深の理由を明らかにする。労働生産物が商品形態をとるとき不可避となるこの秘密を解明しようとするとき、その鍵となるのがかの「労働の二重性」である。まず、商品の物神的性格の由来は商品の使用価値でも価値でもない理由として挙げる第1のものとなる。あらゆる労働はいかなるものであれ、「人間的有機体の諸機能」(S. 85.)であることにはかわりない。しかも、これら機能は、これまたいかなるものであれ、「本質的には人間の脳髄、神経、筋肉、感覚器官などの支出」(*ibid.*)である点で共通である。すでに摘記した抽象的人間的労働の再規定がここに見いだす

ことができる。

労働生産物が商品形態をとるとき必然的に出来る物神性は、以下3段において理解される。まず、人間の合目的的営みの結果としての労働が人間の労働ということでの同等性はどのようにして確認されるか。それは、「物的形態」(S. 86.)を通してである。つまり、「価値対象性」(*ibid.*)において同等だということの確認されるのだ。つぎに、価値の大きさの規定はどのようにしておこなわれるのか。それは、人間の労働力の支出をその継続時間で測定できはしても、この場合も、労働生産物の価値の大きさとしてあらわれる。最後に、商品生産者たちの取り結ぶ社会的関係は、そのものとしてではなく、労働生産物相互の関係としてあらわれる。

「商品形態は、人間にたいして、人間自身の労働の社会的性格を労働生産物そのものの対象的性格として、これらの物の社会的自然属性として反映させ、それゆえまた、総労働にたいする生産者たちの社会的関係をも、彼らの外部に実存する諸対象の社会的関係として反映させる」(*ibid.*)。

「物と物との関係という幻影の形態」(*ibid.*)という「物神崇拜」(*ibid.*)は、「商品を生産する労働に固有な社会的性格」(S. 87.)から生じる。相互独立して営まれる私的労働によってのみ使用対象が商品になる。これら私的諸労働の総体が社会的諸労働をなすのであるが、この社会的諸労働の一環であったことが判明するのは私的諸労働の結果である生産物が相互に交換されてからのことである。まさに事後的にしか実証されない。したがって、「生産者たちにとっては、彼らの私的諸労働の社会的諸関連は、そのあるがままのものとして、すなわち、人と人が彼らの労働そのものにおいてとり結ぶ直接的に社会的な諸関係としてではなく、そうではなくむしろ、人と人との物的諸関係および物と物との社会的諸関係としてあらわれる」(*ibid.*)。

私的諸労働は、第1に、まずは有用であり必ずや社会的必要を満たさなければならず、「総労働の、自然発生的な社会的分業の体制の、諸分枝」(*ibid.*)であることを、事後的であれ証明しなければならない。それだけでなく、第2に、いかなる私的諸労働であろうと他の私的諸労働いつでも交換可能である

ことをもってしてはじめて他人の様々な欲求を充足させることができる。この「二重の社会的性格」(ibid.)を通して種々異なった私的諸労働がただの一つの共通点、つまり抽象的人間的労働に還元されることで「社会的性格」が付与される。すなわち、「私的諸労働の社会的な有用的な性格」(S. 88.)を他人にとって有用であるという使用価値形態で、そして「種類を異にする労働の同等性という社会的性格」(ibid.)をいついかなるときでも共通な抽象的人間的労働という価値性格で、それぞれあらわされるのである。

[6] すでに「序一 [2]」で触れたように、マルクス以前の最良の経済学者をもってしても、とりわけその最高の到達点であった古典派経済学にあっても、「価値にあらわされるかぎりでの労働と、生産物の使用価値にあらわされるかぎりでの労働とを、どこにおいても、明文によっては、また明瞭な意識をもっては、区別していない。」(既引用)

そして、古典派経済学がなにゆえこのことを分析しえなかったか。価値形態論が欠如したのか。その答えは明白である。「(ブルジョア的：引用者注)生産様式を社会的生産の永遠の自然的形態」(S. 95.)とみるとき、「価値をまさに交換価値にする価値の形態」(ibid.)が「ブルジョア的生産様式のもっとも抽象的な、しかしもっとも一般的な形態」(ibid.)であること、さらにブルジョア的生産様式をして「ひとつの特殊な種類の社会的生産として、それゆえまた同時に歴史的なもの」(ibid.)であることは、科学的分析の埒外に放逐される。

[7] さて、「労働の二重性」の理解があればこそその真価を発揮するのは第3篇「絶対的剰余価値の生産」第5章「労働過程と価値増殖過程」および同第6章「不変資本と可変資本」である。ここでも当該の論点に絞って要約しておこう。労働過程を「どのような特定の社会的形態にもかかわりなく考察」

(S. 192.)したとき、あるいは同じことだが「単純で抽象的な諸契機において叙述」(S. 198.)したとき、労働は「人間と自然とのあいだの一過程、すなわち人間が自然とのその物質代謝を彼自身の行為によって媒介し、規制し、管理する一過程である。人間は自然素材そのものに一つの自然力として相対」(S. 192.)し、労働過程は「諸使用価値を生産するための合目的的活動であり、人

人間の欲求を満たす自然的なものの取得であり、人間と自然とのあいだにおける物質代謝の一般的な条件であり、人間生活の永遠の自然的条件であり、それゆえこの生活のどの形態からも独立しており、むしろ人間生活のすべての社会形態に等しく共通なものである」(S. 199.)。

ところである特定の使用価値を生産するためにはこうした「合目的な活動または労働そのもの」(S. 193.) とならんで労働対象・労働手段が必要である。完成された生産物の観点からすれば、この労働対象・労働手段は生産手段として機能し「生きた労働の对象的要因」(S. 197.) となり、合目的労働は生産的労働となる。前者の生産手段はその使用価値の性格に応じて原料や労働手段や生産物として機能するが、本質的同一性は「生産手段として新たな労働過程にはいり込むことによって生産物という性格を失う」(S. 197.) ということ、したがって生きた労働との接触によって「現実的で有効な使用価値」(S. 198.) に転化される必要があるということである²⁾。

[8] さて、商品生産を問題にする場合、使用価値生産を目的とするのではない。使用価値が生産されるのは「一般に、それらがただ交換価値の物質的基体、その担い手であるがゆえに、またその限りでのみ」(S. 201.) である。この使用価値だけでなく生産するにさいして要した価値額を上回る価値額をもつ商品を生産しなければ意味がない。とすれば、商品が使用価値と価値との統一であることとまったく同様に商品の生産過程とは「労働過程と価値形成過程との統一」(S. 201.) でなければならない。

生産手段に体现された労働の量は、「過去完了」(S. 202.) のものであれ「現在完了」(*ibid.*) のものであれ、ひとしく生産手段の価値の構成部分をなす。もちろんこうであるのは、この生産手段という使用価値の生産を担い、しかも一定の生産条件のもとで社会的に必要な労働時間が費やされたということに

2) 上述した労働過程の一般性は超歴史的なものである。この同じ過程が資本主義的生産のもとで、したがって「資本家による労働力の消費過程」(S. 199.) としておこなわれるとき、「二つの独自の現象」(*ibid.*) をもつ。「労働者は、自分の労働の所属する資本家の管理のもとで労働する」(*ibid.*) ということと、「生産物は資本家の所有物であり、直接的生産者である労働者の所有物ではない」(S. 200.) ということがそれである。

よってである。すべての労働が価値形成にはたす役割はすでにみた使用価値を創出するという側面からの労働過程一般とは異なり、具体性を捨象された労働一般という資格においてのみである。「労働の質、性状、および内容」(S. 204.)ではなく支出された労働量(労働時間)が問題となる。まことに「労働はたえず不静止の形態から存在の形態に、運動の形態から対象性の形態に転換する」(ibid.,)。ところで、この労働量の大小のみが価値形成に関係するのとまったく同様に、生産手段のありようも変化する。ある具体的な労働が支出されこの生産手段に付加されることによってあらたな完成生産物をうみだす。この過程で生産手段は一定分量の労働を「吸収³⁾」し生産物のうちにその価値を再現する。

[9] ところで、「労働力のなかに潜んでいる過去の労働」(S. 207.)・「労働力の日々の維持費」(ibid.,)と「労働力が遂行することのできる生きた労働」(ibid.,)・「労働力の日々の支出」(ibid.,)は異なるものであり、いうまでもなく前者は「労働力の交換価値」(S. 208.)・「労働力の価値」(ibid.,)を規定し、後者は「労働力の使用価値」(ibid.,)・「労働過程における労働力の価値増殖」(ibid.,)を形成する。前者を後者から減じたところの価値差こそ資本家が労働力商品に期待する最大のものであり、剰余価値の源泉となる。こうして、資本家は「諸商品の死んだ対象性」(S. 209.)と「生きた労働力」(ibid.,)とを合体することによって、「価値」=「対象化された過去の死んだ労働」(ibid.,)をして「資本」=「自己増殖する価値」(ibid.,)に転化させることができる。

もし、この過程が労働力の価値を補填する点まで継続するとき、それは価値形成過程であり、労働力の価値を補填する点を凌いで継続するとき、それは価値増殖過程となる。そして、価値形成(増殖)過程とは、労働過程が具体的有用的労働の質的編成においてのみ関係するのにたいして、抽象的人間的労働の支出量の多寡にのみ関係する。

3) 「吸収者 *Aufsauger*」・「吸収 *Aufsaugung*」・「吸収する *einsaugen*」・「吸収された *ingesaugt*」とりわけあとの2つの動詞・過去分詞(形容詞)としての使用はここ「労働過程と価値増殖過程」で頻出する。「不変資本と可変資本」の章では1箇所(S. 216.)だけである。

[10] こうして「以前、商品の分析から得られた、使用価値を創造する限りでの労働と、価値を創造する限りでの同じ労働とのあいだの区別は、いまや、生産過程の相異なる二面的区別としてあらわれた。」(S. 211.)「労働過程と価値形成過程との統一としては、生産過程は商品の生産過程である。労働過程と価値増殖過程との統一としては、それは資本主義的生産過程、商品生産の資本主義的形態となる。」(ibid.,) [未完]